

図書館だより

2022冬

No. 265

調布市立図書館

水木しげる氏

表紙絵

＝温もるのお＝

表紙絵：水木しげる

- | | |
|--------------------------|-----|
| ・ 特集：私のすすめるこの一冊 | 2～6 |
| ・ 令和4年度 絵本の読み聞かせ講座 | 7 |
| ・ 郷土の歴史と伝承 | 8 |

※音声版、マルチメディアDAISY版もあります。ご希望の方は図書館へお問合せください。



私のすすめる **こ** **の** **一** **冊**

皆さんからお寄せいただいた「私のすすめるこの一冊」です
今年はどんな本と出会えるでしょうか



『嘘つきアーニャの真っ赤な真実』

米原万里/著 角川書店

推薦者：小塚恵子こづかけいこ

作者の米原万里は、各国子女の集う国際性豊かなプラハのソビエト学校で数年を過ごした。そこで一緒に学んだ仲良しの少女たち。作者万里が数十年後に、その親友3人の「今」を知るために、国境を越えて行方を探し、会いに行く話。

巡り合うまでのいきさつは、ハラハラ、ドキドキとサスペンスを読む様。また、すばらしい描写力にも注目して欲しい。訪ねる国や街、そこでの「空気」「風」「光」そして、人々の「足音」や「息づかい」までも感じられる。

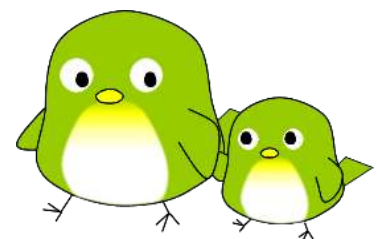
政治や社会に翻弄され、激動の時代を生き抜いた少女たち。「今」の生活に至るまでの背景も興味深く、民族や宗教など東西の国々の複雑な関係も知ることができる。ウクライナ侵攻の続く今だからこそ読んで欲しい一冊です。

『ヘブライ文学散歩』

母袋夏生/著 未知谷

推薦者：井上暁子いのうえあきこ

ユダヤ系文学が好きで、今年亡くなった児童文学者ウーリー・オルレブの作品も翻訳される度に注目してきた。そしてオルレブ作品の大半の翻訳を手掛けたのが母袋さんだった。翻訳家としての母袋さんの名前は私の記憶に刻み続けられてきたわけだが、どんな方なのだろうとずっと気になっていた。そして待望の本書が出版されたので小躍りし、飛びついたのであった。想像していた以上におもしろく、興奮しながら、そして考え込みながら読んだ。ヘブライ文学とは何か。紹介している多くの文学作品、あるいは母袋さん自身のイスラエル滞在時の体験、作家との交流などを読みながら、複雑に絡み合った言語、民族、国家などに関して深く考えさせられた。文学を通して歴史や文化的背景を理解していくことの重要性を改めて認識させられる一冊で、折に触れて何度でも読み直したいと思う著作である。





『教科書名短篇家族の時間』

中央公論新社/編 中央公論新社

推薦者：上江結弥 かみえゆうや

この短編集の中の「幸福」（安岡章太郎著）を紹介します。

皆さんにとっての、大切な思い出とは何ですか。この話は、主人公が子どものときの思い出の回想録です。子どもだった当時の主人公は、親からの言いつけで寝台車の切符を買うためにおつかいに出ます。無事に駅で切符を購入した主人公でしたが、駅員が間違えたのか、本来の額を上回るお釣りが手渡されます。それを受け取った帰り道、懐があたりかくなかった主人公は、あれを買おうかこれを買おうかと頭を悩ませますが、最後には…。この話では、子どもならではの想像力をはたらかせた主人公の心の動きが優しい筆致で描かれており、一度読めば心がほっこりすること間違いなしです。また、主人公と登場人物との関わりも緻密に描かれています。人との付き合いが減った今だからこそ読んでほしい名作です。

『障害者たちの太平洋戦争－狩りたてる・切りすてる・つくりだす－』

林雅行/著 風媒社

推薦者：長尾敏博 ながおとしひろ

著者は本書執筆の動機として、1つは映像作家として制作した3作目で、空襲で負傷し眼に障害を受け後遺症に悩み自分を障害者ではなく「戦災傷害者」と言い、戦後は国家補償を求める運動に邁進した1人の女性を取り上げた。本書第2部で詳述。では戦争中の障害者はどうだった？と疑問を持つ。2つ目は著者自身眼に障害を持ち身内に知的障害者がいたことだった。本書で取り上げた視覚障害者、聴覚障害者には何とか国に報いる道があった。肢体不自由児の光明学園は、疎開の対象から除外されるも自力で疎開、苦勞しながらも終戦を迎えた。知的障害児の藤倉学園も温暖な大島から極寒の清里へ疎開を余儀なくされ、寒さと飢えで犠牲者が出てしまった。列車で移動中子どもたちを見た憲兵が「私が処分してあげましょうか」と囁く。即座にあの相模原の知的障害者殺傷事件を思い出した。自分が憲兵のつもりだったか。障害者にこそ重い負担を強いる時代。忘れてはならない。

『あいたくてききたくて旅にでる』

小野和子/執筆 PUMPQUAKES

推薦者：上江聡子 かみえさとこ



普通の主婦だった著者が昔話に魅せられ東北の山村漁村をめぐり歩いた50年の記録である。はじめは「昔話がころっと転がっているのを拾う」気持ちだった著者が、徐々に採訪者として成熟していく。昔話を乞うた戸口に出たおじいさんが「戦争でニューギニアに連れていかれた息子が布団の足元に立っていた。それが戦死の日時だった。」とだけつぶやいて採訪が終わり、「昔話を聞かないんですか？」と尋ねる同行者に「今聞いたでしょう」と著者が返す件がある。一期一会の様々な出会いを経て、一つの文化論に結実する様に感銘を受けた。

「なら梨とり」の母はなぜ「なら梨などいらないから行くな」と止めずに次々山へ行かせたのか。「猿の嫁ご」の猿はなぜ理不尽な仕打ちを受け続けるのか。はっとする追究が多かった。

人生のつらさを苦勞話、そして笑い話にしていく。昔話は、連綿とした営みの中で、飲み込み切れなかった人々の思いの集合体なのだろうと気づかされた。

『この海を越えれば、わたしは』

ローレン・ウォーク/作 中井はるの/訳 中井川玲子/訳 さ・え・ら書房

推薦者：原田純子はらだじゆんこ

泣き声がカラスに似ているから“クロウ”と名づけられた少女。赤ちゃんの時小舟にくくりつけられて海を流れてきた。拾ったのはオッシュ。画家で漁や畑をしながら一人で暮らしている。クロウは8才になる頃、自分はどこから来たのか、本当の名前は？など疑問があふれてきた。オッシュは「おまえのすることがおまえになる」答えは自分の中にあると取り合わない。隣の島にミス・マギーが住んでいて、何かとクロウの世話を焼く。マギー以外の島の住民はクロウに近づかない。どこかクロウを怖がっているように見える。ある日マギーが教えてくれた。「クロウはペニキース島から来た」と思われているからだ。その島は今は誰も住んではいないが、昔ハンセン病患者の療養所があった。

12才になったある晩、望遠鏡で海を見ていると、その島に明かりがついているのを見た。誰かいる。自分が誰かわかる時が来たかもしれない。クロウの自分探しの冒険が始まる。

『時限病棟』

知念実希人/著 実業之日本社

推薦者：上江智希かみえとちき



起きたらそこは、廃病院だった。そしてそこには、タイマーのついた…爆弾っ!!
そこは数年前、違法な臓器移植を行い、それを知った元患者によって当時の院長を含む職員3人が殺されたあの“田所病院”だった。さらに田所病院では1年前、映画監督が自殺していた。監禁されたのは男女5人。はじめは協力し、ピエロの謎を解き脱出しようとするも、迫りくる死への恐怖、徐々に明かされていく1年前の二人の人間の死の真相で疑心暗鬼になってゆく5人。場には混沌が満ちてゆく。そんな中、1人の女性が殺される。彼女を殺したのはいったい誰なのか、そしてピエロの正体は一体。それらが分かった瞬間、世界がひっくりかえる。

大ヒット作『仮面病棟』の続編。前作を超える衝撃の詰まった359ページ。6時間後、全てが壊れる!!!

『あらすじで読む日本の名著』

小川義男/編 楽書館

推薦者：佐々木功ささきいさお



実に文学の宝石箱と考えます。編著者の小川義男先生が本書のはじめに、人は文学に触れる中で自らの小さな経験を超えて、人生に対する思いを深めることができる。同時に私は、文学作品は言語の内容を深めるものであるとも思う。互いに、同じ作品を読んでいるという文化環境が、会話を密度濃く、内容の深いものにしていくのである。と、又、私は日本文学の名作鳥瞰図とも呼べるような「あらすじもの」をつくれば、高校生もおもしろさ、思想的深さを垣間見て、原作を読みたいという気持ちになるのではないかと考えた。これらの思いを狭山ヶ丘高等学校の先生に呼びかけたところ、忙しい校務の中、さまざまな教科の先生方が自らの心に残る文学作品に取り組み、あらすじを書きあげてくれた。そのまま、私の推薦の思いとして口を挟まず書きました。本書は実に明確にあらすじと作者紹介をして下さっており、素晴らしいです。No. 2も出版されていて同様です。



『小公女』

フランシス・ホジソン・バーネット/作 高樓方子/訳

福音館書店

推薦者：上江明穂^{かみえあきほ}

みなさんはこじきとは何か、知っていますか。私はこの本を読んでこじきという言葉を知りました。

この本の主人公となるのがセーラ・クルーという、何々になったつもりというちょっとした遊びをするのが大好きな少女です。セーラは灰色がかかった緑の目をし、そしてたいへんなお金持ちです。小さいころにあこがれたゆめのような世界がかいてあります。まずセーラの父、クルー大尉と共に、セレクト女子寄宿学園にやってきます。友達もでき楽しい生活は続きました。しかし、愛する父、クルー大尉が亡くなります。とても悲しかったです…。クルー大尉がいなくなったため、お金をはらう人がいなくなり、そのためミンチン先生からとてもひどいしうちをうけました。インドの紳士が助けてくれたときは感動しました。ミンチン先生にとってもはらがたったときもありました。楽しいのでぜひ読んでください。ちなみに私は近所の灰色がかかった緑の目の猫にセーラと名付けました。

『アンネの日記—グラフィック版—』

アンネ・フランク/著 アリ・フォルマン/編 デイビッド・ポロンスキー/絵

深町真理子/訳 あすなる書房

推薦者：川勝厚志^{かわかつあつし}

この本は第2次世界大戦下、ナチスのユダヤ人迫害から逃れて、秘密の隠れ家に暮した少女の13才から2年におよぶ日記、そのグラフィック版です。ポイントは2つ、「はじけるアンネの魅力」、「これなら読める」です。

アンネの日記というと、「理不尽な状況下における苦闘」「平和への強い願い」というイメージが先行しますが、本来この日記は「早熟で好奇心旺盛な少女が、特殊な状況下とはいえ、日常の生活をみずみずしい感性で記した、たぐいまれな日記」なのです。ただ、日々繰り返される同じような出来事の描写も多く、私は読むのを挫折してしまいました。

ところが、このグラフィック版が登場、もとの文章の5%ということですが、素晴らしい絵とともに、隠れ家での様々なエピソード、アンネの内面の声、社会へのメッセージが、生き生きと伝わってきます。「これで、読めた」「アンネの魅力がはじけた」です。

『アウシュヴィッツの図書係』

アントニオ・G.イトウルベ/著 小原京子/訳 集英社

推薦者：三好博^{みよしひろし}



不思議な実話です。アウシュヴィッツ収容所の31号棟には子供たちが入れられていたのですが、大人たちはその子供たちを相手に秘密の学校をやっていた。(SSに見つからないようにしながら)それにつながるような形で、秘密の図書館があった。それを一人の少女が運営していた。でも、全部で8冊しかない、という小さな小さな図書館の話。その少女ディダはアウシュヴィッツからベルゲン・ベルゼンに移送されるが、彼女は奇蹟的に生きて収容所を出て、のちにイスラエルで暮らすことができた。(ベルゲン・ベルゼンでは、かのアンネ・フランクがチフスで死んだのでした)ベルゲンまでの二人の運命はよく似ているのだが、最後で明暗を分けた。著者イトウルベ氏は実際に、長生きしたディダに会って、非常な感銘を受けてこの本を書いたので、「アンネの日記」に比べられる作品です。(何十年後にはそうなっても不思議ではなさそう)



『夢見る帝国図書館』

中島京子/著 文藝春秋

推薦者：中井あつし

上野公園の一角にある「国際子ども図書館」の建物はかつては「帝国図書館」でした。今でもクラシックな内装と階段室は当時のまま残っています。

明治初期に福沢諭吉が日本を近代化し、欧米との不平等条約を撤廃するには「ビブリオテーキ」が不可欠だと設立されましたが、その後西南戦争、日清日露戦争、太平洋戦争と戦争のたびに戦費優先で図書館予算が削られてしまい、金欠の歴史でした。上野戦争、関東大震災、太平洋戦争と上野の地は何度も戦火に焼かれ、無残な血が流されてきました。

本作では擬人化された帝国図書館が樋口一葉に恋をしたり、戦時下には動物園での猛獣毒殺を間近に聞いたりもします。

本作は帝国図書館の歴史が語られると共に、戦争孤児だった少女のルーツを探すミステリー小説でもあります。

果たして「ペンが剣よりも強」かったのでしょうか？そんな思いに駆られながら読みました。



『ごろごろにゃーん』

長新太/作・画 福音館書店

推薦者：上江博幸

たくさんの猫をのせた魚型飛行機が「ごろごろ にゃーん」と音を立てて、いろいろな場所を旅する絵本です。

離陸したら「ごろごろ にゃーん ごろごろ にゃーんと、ひこうきは とんでいきます」のフレーズの繰り返し。その表現は実に14回。でも、中身はそう単純ではありません。繰り返されるフレーズの数だけ乗客の猫たちには、出会いと感動が訪れます。時には飛行機から大海原に釣竿を垂らし、機内食？のための魚を釣ったり、大きな鯨や蛇と一緒に飛んでみたり、宇宙まで行き着いてみたり、それはもう普通の飛行機旅行とはかけ離れた異次元の世界なのです。

そして、機内に乗りこむ一人一人（匹？）の表情が丁寧に描かれており、そこからストーリーが垣間見えます。こどもたちに読みきかせるとき、聞き心地のよいことばのリズムと、大きな世界観、そして猫たちから広がる想像力が、自由な表現の世界を広げるのです。おこさんとぜひ一度飛行機で猫たちと旅に出ることをお勧めします。

たくさんのご応募ありがとうございました。

お寄せいただいた原稿は、掲載の都合により一部編集させていただきました。掲載は順不同になっておりますが、ご了承ください。



令和4年度

絵本の読み聞かせ講座



調布市立図書館では、年に1回、子どもへの読み聞かせに関心のある方を対象に連続講座を開催しています。今年度の講座の様子をご紹介します。

10月6日(木) 1日目



1日目は、「なぜ読み聞かせが大事なのか」といった講義や、絵本の持ち方など読み聞かせのコツをお話ししました。講師による読み聞かせを聞く時間もありました。

手あそびの練習中!



10月13日(木) 2日目



2日目は、読み聞かせにおすすめの本として、たくさんの絵本をご紹介します。受講者の方による読み聞かせ実演と、講師による講評も行いました。



市内各図書館で配布しています



▲『今日のおはなしなーに?』
絵本の持ち方のポイントや、読み聞かせをする際の留意点などが載っています。



毎年好評いただいている講座です。今年度の応募倍率は2.6倍!多くの方が読み聞かせに興味をお持ちだということがわかります。次年度以降も開催予定です。ご参加お待ちしております。

調布の人形芝居と農村の祈り

関 口 宣 明 のぶ あき

1. 祭りで演じられた人形芝居

江戸時代から、武蔵野台地には、たくさんの村ができ、多摩川に近い低地では、米づくりも行われました。村人は米づくりがうまくいくようにと、神社の祭りで「人形芝居」を奉納し、神をなごませて豊作を願いました。

調布では、国領出身の玉川文楽（本名、薫森利三郎・二代目、亮）が、おもに明治から大正にかけて「車人形」とよばれる芝居を各地の祭りなどで演じていました。「車人形」は、小さな箱形の車に、つか遣い手が腰かけ、脚色した歴史的な出来事や伝説などを三味線のひき語りで人形をあやつる舞台芸です。

2. 神の宿る人形と出し物

古くから人形には神が宿るものとされてきました。そこで、芝居の始まりには、大地にひそむ悪霊を踏み鎮めるために、「三番叟」という特別な人形をまわして舞台を清めました。



三番叟

玉川文楽の出し物には、江戸で人気のあった「神霊しんれい矢ぐちのわたしやぐちのわたし矢口渡し」（多摩川で謀殺ぼうさつされた14世紀の武将、新田義興事件にもとづく歴史小説で、舞台として、稲城市矢野口と大田区矢口の二説がある。⁽¹⁾）や、暮らしに困る農民のために年貢の減免を將軍に直訴して、親子とも刑死した物語「佐倉義民伝さくらぎみんでん」の水神森の渡し場（千葉県印旛沼）など、川、沼、舟といった「水」にかかわるものが多いです。

3. 祟り神としての水神

「水」は「三途の川」やお盆の「灯笼流し」のように、あの世とこの世をつなぐ路として考えられていました。悲劇的な死をとげた主人公の霊魂には、日照り、洪水、疫病などをまねく荒々しい水神の性格がありました。

そこで村祭りに人形芝居を演じて、死者の霊をとむらい、なぐさめて、農耕に必要な水や天候の安定を祈願しました。

このような水と祟り神にまつわる出し物を人形芝居で演じると、実際に雨が降ったと伝えられるところが、関東や関西の各地にあります。⁽²⁾ 調布の玉川文楽の人形芝居にも、降雨をもとめる人々の切実な期待や願いがあったと考えられます。

4. 娯楽の変化と人形芝居

調布が大正期を境に「東京の郊外」となるにつれ、農村のくらしにも変化があらわれてきました。そして、人形が演じる涙の物語に共感した、人々の水神への信仰心も薄れていきます。さらにこの時代に活動写真（映画）などの娯楽が広まりはじめると、人形芝居はしだいに行われなくなりました。

しかし今日でも庶民の正義や幸福への願い、親子の情愛などを豊かに表現した「人形芝居」は、情操をやしなう娯楽になりえます。調布の車人形は後継者が絶えて久しく、人形たちも出番をまっているかも知れません。

現在、人形と道具は調布市郷土博物館に保管されており、将来、地域文化の一つとして後世に伝えるためにも、その復活が望まれます。

※注

(1) 『新多摩川誌 本編 中』(2001年)

(2) 高谷重夫『雨乞習俗の研究』(1982年)

刊 行 物 番 号

2022-131

図書館だより 第265号

令和4年12月25日発行 [市内印刷]

発行 調布市立図書館

〒182-0026 東京都調布市小島町2-33-1

TEL 042-441-6181

<http://www.lib.city.chofu.tokyo.jp/>